



医師のために論じた判断できない 抗菌薬のいろは 第3版

原著タイトル: Antibiotic basics for clinicians:

The ABCs of choosing the right antibacterial agent, 3rd edition

岩田健太郎 監訳

●B5変 頁354 2019年4月

定価: 本体5,000円+税

[ISBN 978-4-8157-0162-8]MEDSi刊

このたび、Alan Hauser 著の“Antibiotic basis for clinicians: The ABCs of choosing the right antibacterial agent, 3rd edition”の日本語版である『医師のために論じた判断できない抗菌薬のいろは』が発刊されることとなった。

監訳者はわが国を代表する感染症医である、神戸大学大学院医学系研究科微生物感染症学講座感染症治療学分野の岩田健太郎教授である。すでに前2版は岩田教授の監訳により『抗菌薬マスター戦略』として刊行されており、今回、内容・タイトルを一新しての発刊となった。

臨床現場における抗菌薬投与の基本は、感染症の原因となる細菌を決定し、薬剤感受性試験成績の結果を踏まえたうえで、抗菌薬の体内動態などを加味し、抗菌薬を選択投与することにある。しかしながら、実際には、原因菌や薬剤感受性試験成績の結果判明までにはかなりの時間を要するため、原因菌を推定し、エンピリックに抗菌薬を投与しなければならない場合も少なくないため、まずは、“感染症治療の基本”を理解していくことが重要となる。

この“感染症治療の基本”を学ぶための著書は数多くあるが、本書は他書に比べ、感染症治療を理解し、抗菌薬の適正使用を実践していくうえで絶対にはずしてはならないポイント、エッセンスを取り上げ、わかりやすく解説を加えている。本書の構成は、感染症の原因となる「細菌の基本」「抗菌薬」「原因限定治療」「エンピリック治療」「症例問題」「復習問題と解答」「付録」

となっており、監訳者の岩田教授も序文で述べているように、本書は実際の臨床現場における感染症診療の流れ、アプローチのポイントを示した、まさに“渋い”内容となっており、本書を物語のように読み進めていくことで、知らず知らずのうちに、“感染症の基本:「A, B, C」「い, ろ, は」”が理解できるようになっている。加えて、孫子や宮本武蔵などの“言葉”, わかりやすい“図表”“歴史”“パール”“覚えておこう”“問題”などがちりばめられ、興味や理解を深めながら読んでいける特色のある内容となっている。

現在、世界保健機関(WHO)は薬剤耐性菌制御を最重要項目として位置づけており、わが国においても2016年4月に政府から薬剤耐性(AMR)アクションプランが提言され、薬剤耐性菌制御、抗菌薬適正使用が国家戦略として推進されつつある。そのため、多くの医療施設で、AST(antimicrobial stewardship team)が結成され、医師だけでなく、看護師、薬剤師、検査技師の多職種理解・協力のもと、抗菌薬の適正使用についての取り組みが始まっている。

本書は医師だけでなく、看護師、薬剤師、検査技師など多くの職種にとって「感染症の基本」を理解し、臨床現場における抗菌薬適正使用を実践していくための指南書として、まさに最適である。本書を“座右の書”として活用することで、多くの医療施設で抗菌薬の適正使用が実践され、感染症に苦しむ多くの患者さんにとっての最適な治療、薬剤耐性(AMR)の制御がはかられていくことを大いに期待したい。